

説明・対話・共有



世界有数の投資家レイ・ダリオ氏は、「**真実を隠すことなく語り合う
勇気**」こそ、信頼と成長の原点だと説きます。彼は“ラディカル・トラン
スペアレンシー（徹底した透明性）”という理念をかかげ、運営するファ
ンドを世界最大の規模になるまで育て上げました。

この考えは、五百年以上前に生きた蓮如上人（本願寺第八代宗主）の歩み
にも重なります。一方は現代の投資家、もう一方は五百年前の宗教者。二人
に、どんな共通点があるのでしょうか？



蓮如上人が「本願寺中興の祖」と呼ばれるのは、単に本願寺を大教団に
発展させたからではありません。**“形ばかりの念仏”ではなく、「南無阿弥陀仏」の中に込め
られた阿弥陀さまの心を、一人ひとりにわかるように伝えられた**からです。

上人はそれをお手紙で、専門用語だけでなく日常の言葉を使いながら、人びとに届けました。

『御文章』五帖十一通：御正忌章より

**「他力の信心をいただく」とは、「南無阿弥陀仏」の六字のいわれを知ること
あり、それを「信心が定まる」というのです。**

（経典からの専門用語引用：中略）

「南無阿弥陀仏」の「南無」という二字の意味は、念仏以外の雑行を捨てて、疑いなく、
ふたごころなく、ひたすらに阿弥陀さまにおまかせするということです。

そして「阿弥陀仏」という四字は、そうした人びとを阿弥陀さまが必ず救いとおとくくださる、
ということを意味しているのです。



上人はさらに「講」を設けて仏法聴聞をすすめ、「平座」のスタイル
で人びとが共に聞き合い、語り合う場をつくりました。「平座」と
は、僧俗や貴賤の区別をなくして、仏法を聞き・語ることです。また、
私たちに最も馴染みのある『正信念仏偈』も、蓮如上人の時代に開版
され、一般の方が目にしやすく、共に読経できるようにしたものです。

こうして上人は、「念仏の中身」を隠すことなく開いていくことで、**「信心正因・称名報恩
（他力の信心をいただくことによって救われ、阿弥陀さまの御恩に感謝しながら念仏する）」**
という、親鸞聖人の教えの原点（真実の法）へと、人びとを導かれました。

そこにあったのは、**権威ではなく説明と対話、排除ではなく共有**でした。共に聞き、
共に学び、共に喜び道。それは、今を生きる私たちにも通じる大切な姿勢です。

